

P-104

保育所に通う子の親がもつ付き添い入院に対する意識と環境への不安の分析

森藤香奈子¹⁾、西田 奈央²⁾、
長谷崎亞里沙³⁾、深見 華月⁴⁾、
柏原由紀乃⁵⁾、古賀 和⁵⁾、南 真希⁵⁾、
本多 直子¹⁾

¹⁾長崎大学 生命医科学域 保健学系、

²⁾東京都立 小児医療センター、³⁾九州大学病院、

⁴⁾福岡大学 筑紫病院、⁵⁾長崎大学 大学院医歯薬学総合研究科 保健学専攻 看護学分野

【背景】付き添い入院は、子どもの発達や病状、安全の確保などの観点から病院からの依頼されるケースが多く、付き添い者の役割や環境が身心に負担を与えていていることが指摘されている。付き添い環境に関する調査は、長期入院の調査が多く、短期入院や入院を経験していない子どもの親に対する調査は少ない。

【目的】付き添い入院に対する認識や環境への不安を調査し、付き添い入院経験の有無による不安の違いを比較する。

【研究方法】A市内にある保育所4施設に通う子どもの親を対象とし、家庭に1部、無記名自記式調査用紙を配布した。家族構成、就労形態、付き添い入院の認識や経験、子どもの1週間の入院を想定した付き添いの希望と心配事について質問した。心配事は先行研究より抽出した＜食事＞＜整容・身なり＞＜睡眠＞＜仕事＞＜精神面＞＜家族＞＜経済面＞＜プライバシー＞＜体調＞＜医療者との関係＞＜看護師の役割代行＞の11項目のうち、特に不安が強い項目を3つ以内で選択してもらった。調査は所属機関の倫理委員会の許可を得て実施した。心配事の選択状況の比較はカイ二乗検定を行った。

【結果】340世帯に配布、205部回答を得た（回収率60.3%）。不完全回答を除く193部を分析した。回答者は母177名（91.7%）、父16名（8.3%）、ひとり親は8.3%であった。平均年齢は父37.2歳、母35.4歳、世帯当たりの子どもの数は1.81人だった。付き添い入院について知っている人は93.8%、81名が付き添い入院の経験があった。子どもが入院した場合、＜付き添い入院を希望する＞の回答は178名（92.2%）、約9割が入院に伴う支援者がいると回答した。不安の内容は3項目以内で回答した176部で分析した。不安の強い項目は＜仕事＞97名（55.1%）、＜睡眠＞86名（48.9%）、＜精神面＞76名（42.0%）の順であった。付き添い入院経験の有無での比較では、経験あり群の不安が有意に高かった項目は、＜食事＞、＜整容・身なり＞、経験なし群が有意に高かった項目は、＜精神面＞、＜経済面＞であった。

【考察】回収率が6割であり、付き添い入院に対する関心の高さがうかがえた。付き添い経験あり群では、付き添い入院生活で経験上の困り事が反映された可能性があり、＜経済面＞では自治体の制度や補償の知識があることが考えられた。また付き添い入院の希望では、短期間の想定、役割意識の高さ、子育て支援施策による介護休暇等の整備などが要因として考えられた。

P-105

第2子の妊娠・出産が家族にもたらす変化に関する文献検討

永井 智子

目白大学 看護学部 看護学科

【目的】第2子の妊娠・出産は、子どもが複数になることで、家族の生活は大きく変化し、身体的・心理的に負担が大きくなることが推察される。しかし、経産婦は、複数の児を育てるに関する支援が十分でないままに、第2子を迎えた新しい生活を送っている可能性がある。本研究は文献検討を実施し、第2子の妊娠・出産によって家族にどのような変化が生じるのかを明らかにし、経産婦に特有の課題とそのための支援についての示唆を得る。

【方法】2015年以降に発表された国内の文献を対象とし、医中誌Webによる文献検索を行った。キーワードは「(出生順位or第2子) and育児」とし、原著論文を指定した。抽出された論文タイトルや抄録を読み、第2子の妊娠・出産における家族の変化が示されているものを分析の対象とした。文献中から、研究方法、調査対象と期間、家族の変化の状況等を抽出した。

【倫理的配慮】文献検討であり、人を対象とする倫理的配慮を要する研究に該当しない。著作権に配慮し、論文の論旨や文脈の意味を損なわないように意識して実施した。

【結果】医中誌Webから検索された論文数は73件であった。このうち本研究の目的に関連した12件を分析対象とした。第2子を希望して不妊治療を受けている文献、特定の疾患をもつ母親を対象とした事例の文献は対象外とした。研究方法は、インタビューを用いた質的研究7件、質問紙調査3件、介入研究1件、文献検討1件であった。調査対象は、妊娠または産婦8件、助産師2件、父親1件、文献1件であった。研究の期間は、妊娠中のみのもの、産後のもの、妊娠中から産後を縦断的に調査するもの等があった。妊娠・出産における家族の変化については、第1子との関係性によるものが多く、並行して育児を行うことへの困難や疲労の蓄積があげられた。一方で、子どもが増えることに対する楽しさもあげられ、妊娠中に第2子を迎えるためのレディネスを高める必要性を示す文献もあった。

【考察】第2子の妊娠・出産にあたって、家族の生活状況は大きく変化し、特に母親が第1子との関係性を新たに構築しながら、複数の児の並行した育児を行えるような支援が求められる。そのために、経産婦に特徴的な課題を理解し、関係機関と連携したさらなる支援を検討していく必要がある。

【利益相反】なし。2023年度一般社団法人聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金の助成を受けて実施した研究の一部である。